

THE BOSUI JOURNAL

防木ジャーナル

ROOFING/SIDING/INSULATION/RENEWAL

5

2011

No.474

特集

- マンション改修工事の最新動向—外壁改修編
- 塗り床材の用途展開と機能向上への取り組み



呪文の力



私は子どもの頃、祖母から幾つかの呪文を教えられた。先祖から伝承された呪文らしい。何年か前に、所員の1人が飼っていた猫が数週間前から帰らず、家族で探しまわっても一向に見つからないという。そこで、呪文をしたための紙片を渡し、餌鉢をきれいに洗って呪文を入れて伏せ、生きていれば3日以内に帰ってくると教えたところ、その通りになって感謝された。呪文の神秘をにわかに信じ込むものではないが、困った時のよりどころとしては超科学的で心地良い。

私の祖父は、明治生まれの僧侶であったが、若くして死亡し、私は写真でだけしか祖父を知らない。随分昔のことであるが、祖父がしたための幾つかの文書の一部を祖母から引き継いだ。そのうちのひとつが「呪詛(じゅそ)秘伝」である。文書は、漢字とカタカナだけで、昔の言い回しになっており、癖のある筆書きのため私には極めて難解である。そのためか、特に見向きもしなかったが、最近片づけをしていて目に触れることになった。急に興味を持ったのは歳のせいかな。なんとか読めないものかと悪戦苦闘して1年、それが徐々に癖が分かるようになって読み取れるようになってきた。これは、建物にかかった病を見つけることに似ている。読めると言っても私には修行が足りず、意味を理解するには至っていない。祖父の姿を想像しながら、とりあえず現在の言葉に書き換え常用漢字にすることにした。そんなことをしているうちに、何か物足りない気がしてきた。どうも重みがなく味気ない。やっぱり平仮名はやめてカタカナとし、パソコンで印字できる漢字をできるだけそのままにすることで何とか呪文らしく見えてくる。お経もそうである。全部平仮名では、有難味がない。

ちなみに呪詛秘伝の中身は、日常生活に役立つ秘法を中心に並んでいた。黒魔術の類は、一切入っていない。おそらく人の道に外れる呪

詛は、知っていても意図してしたためなかったのだろう。祖父に感謝。

この原稿を書いている最中に、東北から関東に至る広範囲を巨大地震が襲った。呪詛の話などしている場合ではない。地震と言えば建物などの破壊を思い浮かべるにたやすいが、今回は津波による破壊が甚大である。首都圏では、鉄道は止まり帰宅不能という状態で、やむなく事務所に泊まることになった。

すぐさま、メールでマンション管理組合から被害状況が寄せられ、危険度などの判定依頼や被害の相談が舞い込んできた。こんな時は、駆けつけたい気持ちはあっても動けない都市の弱さが露呈し、大自然の前には人間の無力さをまざまざと見せつけられる。

津波からうまく逃れる呪文はないのか探してみたが、見当たらない。地震や津波を邪鬼や魔人の魔除けとみれば、「加太志也波 津可世瀬久 理爾久女流 酒牛醉我 醉仁計理」という呪文があった。これを白紙に朱書きし懐中すべしとある。しかし、最も効果的なことは「危うきに近寄らず」か。とは言うものの、向こうから勝手にやってくるのであるから避けようがない。気安めかもしれないが、早速この呪文を写して財布の中に入れ、護符とすることにした。

ところで、計画停電には困ったものだ。我慢すべきことであっても心が狭いため腹立たしい。電力会社必携の秘法があった。諸事の禍いを断ち切るには、掌中に「除」と書いて原発施設の傍らに行くと良さそうだ。「除」とは、何を除くのか。それは、造り手のこれ以上はないだろうという思い込みや小さな失敗の連鎖による大失敗もしくは石原東京都知事の言うところの「我欲」か。

地震災害にあわれた方々に謹んでお見舞い申し上げます。

(鈴木哲夫)